

嫡男、前左馬頭義朝ガ末子ニテ候ケリ、何ニモシテ平家ヲ滅シ、父ノ本望ヲ達セント思ハレケル
コソ懼ケレ、

〔川角太閤記〕^四鎌倉被成御見物、則若宮八幡へ御立寄被成候時、社人御戸を開き申候へば、左りに

頼朝の木像あるを御覽付られ、御言葉には、頼朝には天下友達に候よ、^略○中氏系圖においては、多

田の満仲の末葉なり、無殘所系圖なり、秀吉は耻敷は候へど、存は昨今迄の草刈わらんべなり、或

時は草履取など仕候故、氏も系圖も持不申候へど、秀吉は心たまらざる目口かはき故、ケ様罷成

候、御身は天下取筋にて候へば、目口かはき故とは不存候、生れ付果報有故なりと、御玄やれ事被

仰候と承り候、

〔難太平記〕我等が先祖は、當御所の御先祖には兄のながれによし、寶篋院殿^{○足利義詮}に申されて、系

圖など御目にかけられたる人ありき、御意大きに背て、後に人に御物語有し也、

〔駿府政事録〕慶長十六年九月十六日、吉田神龍院梵舜、進藤原系圖一卷、

〔泰平年表^{東照宮}〕慶長十六年九月十六日、吉田神龍院梵舜、藤原系圖を獻す、十九年七月九日、飛

鳥井中納言家の系圖、歌道宗匠日記御覽に備ふ、十月廿九日、板倉伊賀守取次にて、妙覺寺より

曆林問答抄、西宮抄、諸家系圖、^略○中本國寺より太子傳差出す、

〔梵舜日記〕慶長十九年十一月四日、藤原系圖道家所質物左兵衛ヨリ依遣、周慶彌兵衛以兩人種々

申遣借寄申也、今度前將軍家康公就御上洛、系圖七冊書可遣候由、傳長老依申、予先年書寫之本可

上候由間、不及了簡可進上候、用意申付也、及暮傳長老へ令談合處、一段可然候由被仰候間、其通相

定候由也、六日、藤氏系圖七冊、桐箱入進上也、傳長老ヲ以上申了、一段御氣色入義也、

〔東路のつと〕九月^{○永正六年}廿五日、^略○中はま川並松別當にして、
色かへぬ松はくれ行秋もなし、その日九月盡なるべし、^略○中此別當、俗長野姓石上也、並松、上野